

## [D年] 復活節第7主日(2020年5月24日)

## 【旧約聖書日課】列王記下2章1～15節

1主が嵐を起こしてエリヤを天に上げられたときのことである。エリヤはエリシャを連れてギルガルを出た。2エリヤはエリシャに、「主はわたしをベテルにまでお遣わしになるが、あなたはここにどどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、二人はベテルに下って行った。3ベテルの預言者の仲間たちがエリシャのもとに出て来て、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っていてください」と答えた。4エリヤは、「エリシャよ、主はわたしをエリコへお遣わしになるが、あなたはここにどどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、二人はエリコに来た。5エリコの預言者の仲間たちがエリシャに近づいて、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っていてください」と答えた。6エリヤはエリシャに、「主はわたしをヨルダンへお遣わしになるが、あなたはここにどどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、彼らは二人で出かけて行った。7預言者の仲間五十人もついて行った。彼らは、ヨルダンのほとりに立ち止まったエリヤとエリシャを前にして、遠く離れて立ち止まった。8エリヤが外套を脱いで丸め、それで水を打つと、水が左右に分かれたので、彼ら二人は乾いた土の上を渡って行った。9渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。10エリヤは言った。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」11彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。12エリシャはこれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、もうエリヤは見えなかった。エリシャは自分の衣をつかんで

二つに引き裂いた。13エリヤの着ていた外套が落ちて来たので、彼はそれを拾い、ヨルダンの岸辺に引き返して立ち、14落ちて来たエリヤの外套を取って、それで水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言った。エリシャが水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた。

15エリコの預言者の仲間たちは目の前で彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言い、彼を迎えに行つて、その前で地にひれ伏した。

## 【使徒書日課】ヨハネの黙示録5章6～14節

6わたしはまた、玉座と四つの生き物の間、長老たちの間に、屠られたような小羊が立っているのを見た。小羊には七つの角と七つの目があった。この七つの目は、全地に遣わされている神の七つの霊である。7小羊は進み出て、玉座に座っておられる方の右の手から、巻物を受け取った。8巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、豎琴と、香のいっぱい入った金の鉢とを手に持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖なる者たちの祈りである。9そして、彼らは新しい歌をうたった。

「あなたは、巻物を受け取り、

その封印を開くのにふさわしい方です。

あなたは、屠られて、

あらゆる種族と言葉の違う民、

あらゆる民族と国民の中から、

御自分の血で、神のために人々を贖われ、

10 彼らをわたしたちの神に仕える王、

また、祭司となさったからです。

彼らは地上を統治します。」

11また、わたしは見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。12天使たちは大声でこう言った。

「屠られた小羊は、

力、富、知恵、威力、

誉れ、栄光、そして賛美を

受けるにふさわしい方です。」

13また、わたしは、天と地と地の下と海にいるすべての被造物、そして、そこにいるあらゆるものがこう言うのを聞いた。

「玉座に座っておられる方と小羊とに、

賛美、誉れ、栄光、そして権力が、

世々限りなくありますように。」

14四つの生き物は「アーメン」と言い、長老たちはひれ伏して礼拝した。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書7章32～39節

<sup>32</sup>ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにさきやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。<sup>33</sup>そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。<sup>34</sup>あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」<sup>35</sup>すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいうのか。<sup>36</sup>『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」

<sup>37</sup>祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴している人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。<sup>38</sup>わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」<sup>39</sup>イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 列王記下2章1～15節

<sup>1</sup>主がエリヤをつむじ風で天に上げられたときのことである。

エリヤはエリシャと共にギルガルから出て行った。<sup>2</sup>エリヤがエリシャに、「主は私をベテルまで遣わされるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言うと、エリシャは、「主は生きておられ、あなたご自身も生きておられます。私はあなたを離れません」と答えた。それで、彼らはベテルに下って行った。<sup>3</sup>この時、ベテルにいる預言者の仲間が、エリシャのもとに出て来て言った。「今日、主があなたの主人を、あなたから取り去ろうとしておられるのを知っていますか。」するとエリシャは、「私もそのことは知っています。しかし黙っててください」と答えた。

<sup>4</sup>エリヤが、「主は私をエリコに遣わされるが、エリシャよ、あなたはここにとどまっていなさい」と言うと、エリシャは、「主は生きておられ、あなたご自身も生きておられます。私はあなたを離れません」と答えた。それで彼らはエリコにやって来た。<sup>5</sup>この時、エリコにいる預言者の仲間が、エリシャに近寄って来て言った。「今日、主があなたの主人を、あなたから取り去ろうとしておら

れるのを知っていますか。」するとエリシャは、「私もそのことは知っています。しかし黙っててください」と答えた。

<sup>6</sup>エリヤはエリシャに、「主は私をヨルダン川へ遣わされるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。エリシャは、「主は生きておられ、あなたご自身も生きておられます。私はあなたを離れません」と答えた。それで二人は出かけて行った。<sup>7</sup>預言者の仲間五十人も付いて行ったが、二人がヨルダン川のほとりで立ち止まると、彼らも遠く離れて立ち止まった。<sup>8</sup>エリヤが自分の外套を取り、丸めて水を打つと、水は左右に分かれた。そこで二人は乾いた所を渡って行った。

<sup>9</sup>彼らが渡ったとき、エリヤはエリシャに言った。「私があなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何ができるだろうか。何なりと願いなさい。」エリシャが、「どうかあなたの霊の二倍の分け前をくださいますように」と言うと、<sup>10</sup>エリヤは答えた。「あなたは難しい願いをするものだ。私があなたのもとから取り去られるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見なければ、そのようにはならないであろう。」<sup>11</sup>彼らが話しながら歩き続けていると、火の戦車と火の馬が二人の間を隔て、エリヤはつむじ風の中を天に上って行った。<sup>12</sup>エリシャはそれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、しかしエリヤはもはや見えなかった。彼は自分の衣をつかんで二つに引き裂いた。

<sup>13</sup>エリシャは、エリヤの身から落ちた外套を拾い上げ、引き返してヨルダン川の岸辺に立ち止まった。<sup>14</sup>彼はエリヤの身から落ちてきた外套を手にとって、水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言った。彼らが水を打ったときも、水は左右に分かれ、エリシャは渡って行った。

<sup>15</sup>エリコの預言者の仲間は、離れたところからエリシャを見ていて、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言った。彼らはエリシャを迎えに来て、その前で地にひれ伏し、

## ヨハネの黙示録5章6～14節

<sup>6</sup>また私は、玉座およびそれを囲む四つの生き物と、長老たちとの間に、小羊が屠られたような姿で立っているのを見た。小羊には七つの角と七つの目があった。この七つの目は、全地に遣わされている神の七つの霊である。<sup>7</sup>小羊は進み出て、玉座におられる方の右の手から巻物を受け取った。<sup>8</sup>巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老はおのおの、豎琴と、香で満たされた金の鉢とを手を持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖なる者たちの祈りである。<sup>9</sup>そして、彼らは新しい歌を歌った。

**黙想のためのノート**

**次主日聖書日課について**

・5月24日「復活節第7主日」の聖書日課主題は「キリストの昇天」。「昇天日」は、「復活日（イースター）」から40日目の木曜日であるが、伝統的な教会暦を重んじる教派では、「昇天」の記念を必ず行うために、平日の集会・礼拝に集まるのが困難な地域の教会においては直後の日曜日を「昇天主日」として記念するように定めている。教団聖書日課もそれに倣って、「復活節第7主日」を事実上「昇天主日」として聖書日課を選定している。

・キリストの「昇天」の記念を「復活日」から40日目に設定してきたのは、ルカ福音書・使徒言行録の伝える伝承に基づく。しかし、他の福音書や書簡は、キリストの「昇天」を出来事として描写して物語ってはいない。このことは、「復活」が福音書や書簡の中で出来事として描写されて物語られていることと対照的である。ルカ福音書・使徒言行録が物語る「昇天」伝承は、明らかに旧約にある「預言者エリヤの昇天」伝承になぞらえて物語られている（そのような旧約になぞらえた物語り方は、ルカ・使徒言行録全般にわたって特徴的なことである）。

・「預言者エリヤの昇天」は、旧約において特異的な伝承で、信仰者が地上の生涯を終えた後に大地に葬られずに「天に上げられた」とされる例は他に「エノク」（創世記 5:24、ヘブライ 11:5）のみである（モーセは、申命記 34 章で死と葬りが描かれているが、主が葬られたので「だれも彼が葬られた場所を知らない」とされていることから、旧約外の伝承では彼も昇天したと物語られてきた。この伝承により、主イエスが山上で変容された出来事の伝承では、エリヤとモーセが主イエスと共に語り合う相手として理解されることになったと考えられる）。

**旧約日課(列王記下 2 章より)**

・「列王記」上・下は、「サムエル記」上・下と共にイスラエルの王国記としてまとめられた文書であるが、類似の「歴代誌」上・下とは異なり、王国や王権の正統性を主張する立場から編集されたものではなく、「ユダ／イスラエルの王の歴代誌」を原資料としながら、「申命記」に特徴的な神学的歴史観に基づいて再構成された王国記と見ることができる。実際、王国記の体裁を取りながら、重要な役割を果たすのは、各時代の「預言者」たち（サムエル、ナタン、エリヤ、エリシャなど）である。

・日課箇所は、「預言者エリヤの昇天」の出来事を伝える伝承物語。「エリヤ」の物語は、「列王記上」17 章から始まり、イスラエル王アハブの時代の預言者として描かれる。アハブ王は、北王国で初めてサマリアを首都として建設したオムリ王朝の二代目。外国の王女イゼベルを王妃として迎えたことにより、「バアルの神

「あなたは、巻物を受け取り、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、屠られて、その血により、神のためにあらゆる部族と言葉の違う民、あらゆる民族と国民の中から人々を贖い

10 彼らを私たちの神に仕える御国の民に、また祭司となさったからです。

彼らは地上を支配するでしょう。」

11 また、私は見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。その数は千の幾千倍、万の幾万倍であった。12 天使は大声でこう言った。

「屠られた小羊こそ、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。」

13 また私は、天と地、地の下と海にいるすべての造られたもの、そして、そこにいるあらゆるものがこう言うのを聞いた。

「玉座に座っておられる方と小羊に、賛美、誉れ、栄光、そして力が世々限りなくありますように。」

14 四つの生き物は「アーメン」と唱え、長老たちはひれ伏して礼拝した。

**ヨハネによる福音書 7章 32～39 節**

32 ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。33 そこで、イエスは言われた。「今しばらく、私はあなたがたと共にいる。それから、私を遣わした方のもとへ帰る。」

34 あなたがたは、私を捜しても、見つけることができない。私のいる所に、あなたがたは来ることができない。」35 すると、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちが見つけることはないとは、この人はどこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいえるのか。36 『あなたがたは、私を捜しても、見つけることができない。私のいる所に、あなたがたは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」

37 祭り終わりの大事な日に、イエスは立ったまま、大声で言われた。「渇いている人は誰でも、私のもとに来て飲みなさい。38 私を信じる者は、聖書が語ったとおり、その人の内から生ける水が川となって流れ出るようになる。」39 イエスは、ご自分を信じた人々が受けようとしている霊について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、霊がまだ与えられていなかったからである。

殿」や「アシェラの像」を大々的に建造することになった王として、指弾されている。エリヤはこの王および王妃と対峙し、「バアルの預言者」と対決した預言者として描かれるが、より重要な役割として描かれることは、預言者エリシャを正統な後継者としたことである。エリシャは、エリヤが王妃イゼベルからの迫害を逃れてホレブ山に入った際に神から後継者として指名された者として登場し、エリヤの「昇天」の際にその権威を継承したものとして、物語の前面に出てくる。エリシャは、預言者として王国内外の政治に影響を与え続ける人物であり、クーデターによってオムリ王朝を打倒し王権についたイエフの事実上の後見人として描かれている。このクーデターによって、イエフは北王国からバアル神殿を排除したことが強調され(列王記下 10 章)、それによってエリシャの政治行動を神学的に正当化されているが、この一連の政治行動を正当化するのが、エリシャはエリヤの正統な後継者であるということを示す「エリヤ昇天」伝承になる。

・日課箇所、エリヤの昇天を通してエリシャは「(エリヤの)霊の二つの分」(9 節)を受け継いだ者であることが示される。この「霊」は「ルーアッハ」で、創世記 1:2 から始まって旧約全体で最も一般的な「霊」を指す用語。「風」や「香り」をも意味する。「士師記」に描かれる士師の召命に際して臨む「主の霊」や、「サムエル記」でサウルやダビデに降る「主の霊」も、「ルーアッハ」である。

#### 使徒書日課(黙示録 5 章より)

・「ヨハネの黙示録」は、「僕ヨハネ」の名でまとめられた「黙示」=「啓示」の文書で、編集構成上、①ヨハネの見た幻の報告、②幻の報告をまとめて「七つの教会」に宛てた書簡、③書簡を最終的に「預言の言葉」として位置づけた「黙示録」、という三層から成っている。日課箇所は、幻の報告の中、ヨハネが引き上げられて目撃させられた天上の礼拝の幻の一部。

・天上の礼拝の幻は、4 章から始まっている。そこで示されているように、この天上礼拝の幻も、旧約預言書で預言者たちが幻に見た天上の礼拝をなぞったものである。「イザヤ書」6 章、「エゼキエル書」1~2 章などが、その典型例になる。日課箇所中の「四つの生き物は、「イザヤ書」で「セラフィム」、「エゼキエル書」で「ケルビム」として描かれる、神殿中に置かれ、特に「神の箱」の上部に据えられた像を示唆。

・そのことを踏まえると、僕ヨハネが幻のうちに引き上げられて天上の礼拝を目撃したという報告自体が、彼の召命の証しであり、続いて描かれる内容は、召された神の僕として告げるべき事柄である、と言うことができる。日課箇所は、その告知内容に入っていく最初であり、かつて預言者らが見ていた天上の玉座に「小羊」としてのキリストが神と並ぶお方として立たれている、という使信である。ここで「七つ」の列挙は、「七つの教会」と「小羊」の関連性を示すもの。

#### 福音書日課(ヨハネ 7 章より)

・日課箇所は、主イエスが仮庵祭に際してエルサレムに上られたときのこととして場面設定された 7~10 章(10:21 まで)の中に置かれた逸話。ヨハネ福音書は、主イエスが繰り返しユダヤの祭りの際にエルサレムを訪れ、その祭りの意義をご自身の働きの中で再定義して示されたというパターンで、描いている。

・「仮庵祭」は、ユダヤの三大祭の一つで、「過越祭」、「七週祭」と共に、古い農耕祭が「出エジプト」伝承によって新しい意味付けを与えられた祭の一つで、秋に「贖罪日」に続いて祝われた。ヨハネ福音書中では、他に「神殿奉献記念祭」という祭りが取り上げられるが(10:22 以下)、これは、紀元前 2 世紀にセレウコス朝シリア支配下のエルサレムがシリア王によって蹂躪されたことに対して武装蜂起し独立を果たした際、奪還した神殿を清めて再奉献したことを記念するようになった新しい祭(「ハヌカ」)。

・1 世紀のエルサレム神殿は、ヘロデ大王によって 40 年以上かけて大増築され、地中海世界各地からの巡礼者を呼び込む観光資源としての役割を担っていた。そのため、神殿で催される祭も、本来の儀式にとどまらず、参拝者(見物人!)を楽しませる大々的な演出が施されるようになっていたようである。「仮庵祭」は、モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民が、荒れ野で「仮小屋」の生活を 40 年続けた間、神の恵みにより守られていたとの故事を記念する祭で、民の行列の先頭としんがりを守ったとされる「夜の火の柱、昼の雲の柱」や、岩の裂け目から出た「水」で渴きを満たされたことなどを象徴する大仕掛けの演出があったとされる。日課箇所、主イエスが「生きた水」の源としてご自身を示された演説は、この荒れ野で岩の裂け目から流れ出た「水」を指し示す演出に目を奪われている人々を前にしてなされたものである。

・ヨハネ福音書において「水」は、象徴的な意味を与えられて効果的に取り上げられている。まず 1 章では「洗礼」に関するものとして、2 章では「カナの婚礼」で「ぶどう酒」に変えられるものとして、4 章では「ヤコブの井戸」で「サマリアの女」との対話のきっかけとして、さらに 13 章では「洗足」の出来事の中で取り上げられ、最終的には 19 章で兵士に槍で突かれた十字架上の主イエスのわき腹から流れた血と共に流されたという(通常ではありえない)「水」である。

#### 来週の誕生日 (5 月 24 日~31 日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

・21-404 番「あまつましみず」(I 217)は、メソジストの救世学校(後の青山学院)で学んだ永井氾い子が『譜附基督教聖歌集』(1874 年)の編纂に際して作詞した原詞が改変されて歌い継がれてきた。曲は、当時の米国の福音唱歌曲から。